

第11回 条件不利地域の農業を守る：ドイツのアルム酪農

「アルプスの少女ハイジ」をたいていの方は知っていると思うが、そこには、夏の間、アルプスの山の上で牛を飼って暮らすハイジのおじいさんが出てくる。このハイジの世界の農業が今も続けられていることをご存じだろうか。ドイツの南の大都市ミュンヘンから南に50km、南バイエルン州ミースバッハ地区はオーストリアとの国境に近いアルプス地帯だが、そこではハイジの世界の農業である「アルム酪農」が営まれ、この伝統的な農業を守るためにEUやドイツ政府、地元の自治体が様々な支援をしている。



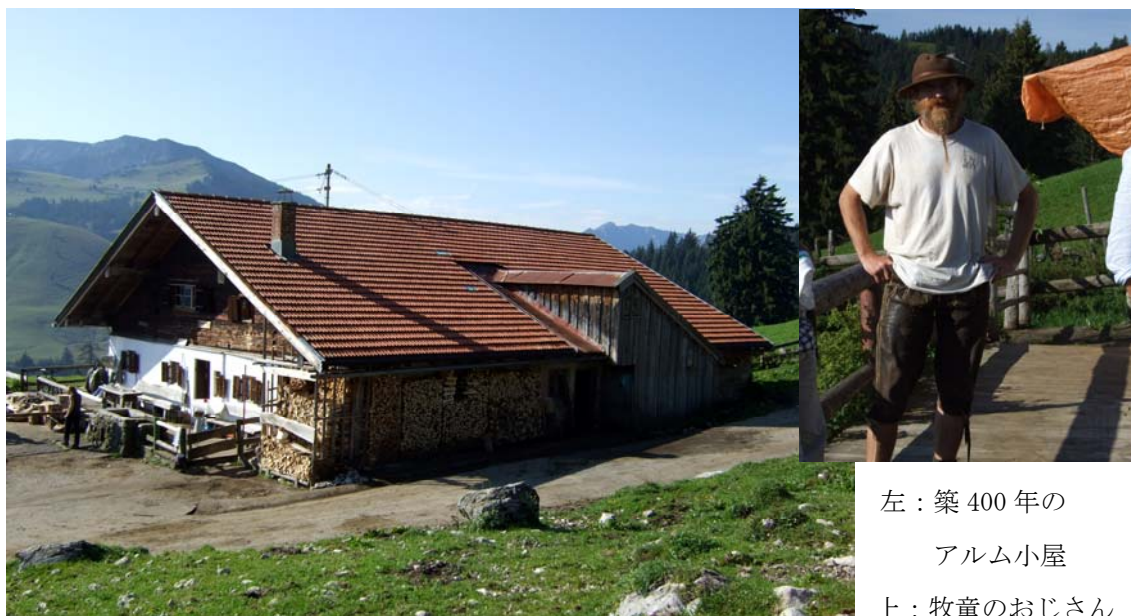
山の中腹にアルム酪農用の小屋が見えるミースバッハの山岳風景

アルム酪農とは、アルプス地方で夏の間だけ牛（子牛が主体）を高地にある草地で放牧する酪農である。山の高い所にある草地をアルムと呼ぶ。放牧期間は5月から9月頃であり、私たちがミースバッハを訪れた9月下旬は、牛をアルムに放っている最後の時期であった。案内してくれたミースバッハの地区事務所のスタッフは、山の中腹に車をとめ、登山靴に履き替えて、放牧地となっている山の斜面を登って行く。所々で牛に会う。30分ほど登った所、標高1163mのアルム用の小屋でカタリーナ・ケルンさんは待っていた。

カタリーナ・ケルンさんは、ここで夫と酪農を営んでいる。

カタリーナさんの一家は少なくとも1180年から、800年以上ここで農業を営んでおり、アルム用の小屋は400年前に建てられたものだ。普段は谷底の集落に住んでいるが、夏の間はこのアルム酪農用の家に通う。農地面積は87haのうち草地が74ha、あとは森林である。一番下の草地から上の草地までの高度差は1400mもある。

アルム酪農期間中は牧童を雇うのが一般的だ。牧童は山の高い所に設けられたアルム用の小屋で寝泊まりし、高地にある草地をまわり家畜の世話をする。ケルンさんの所の牧童は革の半ズボンをはき、山岳帽の下に豊かなヒゲを蓄え、いかにもベテランとの風貌だったが、まだ牧童歴数年とのことだった。



左：築400年の
アルム小屋
上：牧童のおじさん

アルム農業は、酪農家にとって夏の間山の上の豊富な草を利用するとともに、

丈夫な子牛を育てるメリットがある。アルム酪農で生産される牛乳は、オメガアミノ酸が多く品質的にも優れている。一方、アルム酪農が営まれていることにより、草地が維持・管理され、この草地がアルプスの山々の美しい景観を作り、観光客を集める。草地は冬はスキー場となる。山の上から下まで管理されていることで、雪崩や土壌流失の防止といった役割も果たす。アルム酪農がこのような多様な役割を果たしていることに対し、EU やドイツ政府、バイエルン州政府は多額の所得補償を行い、アルム酪農の維持を図っている。



カタリーナさんの酪農経営は搾乳牛 12 頭、育成牛 5 頭と小さく、経営の重点は搾乳よりも子牛の生産のようだ。この他、夏の間乳牛 45～50 頭、馬 10 頭の放牧を預託されている。こちらは、100 日間放牧することで 1 シーズンに 1 頭当たり 65 ユーロ（約 9000 円）を得ている。絞った牛乳は、毎日谷底まで運び、そこで業者が回収に来る。

多様な助成制度の対象となっているとはいえ、このような中小規模の農業経営が苦しいことは世界共通だ。中小規模であっても農業経営を続け、伝統的な農業を次世代に伝えるために、カタリーナさんは様々な努力をしている。取り組みの 1 つは、町の子供たちを対象としたアルム農業体験プログラムの実施である。6～7 月の時期にミュンヘンなどの小学校の 1～4 年生を対象にアルム農業を体験してもらおう。週 2～3 回の頻度で、2 クラスが合同で日帰りで参加し、

乳搾り、草刈り、バターとチーズ作りを行う。バターやチーズ作りの体験のため、カタリーナさんは自分たちのアルム用の小屋の隣にあった使われなくなったアルム用の小屋を買い取り、バターやチーズの加工用の道具を置き、トイレや子供たちが座れる場所をしつらえた。「アルム農業の厳しい現実をみせることが大切だ」とカタリーナさんは言う。

また、カタリーナさんは、自らチーズとバターを作り、消費者に直接販売している。アルムの牛乳にはオメガアミノ酸が多いが、多くの農場から出荷された生乳を混ぜてまとめて出荷される牛乳ではその特徴が出せない。チーズやバターならば、その点を強調することができる。アルム小屋の地下室は常時11度の気温が保たれ、チーズの熟成にはちょうど良い。売り先はロコミで確保している。体験プログラムに参加した子供たちが家に帰って「おいしかった」と家族に伝えることが、最大のPRとなっているようだ。



左：アルム小屋の地下室でカタリーナさんと熟成中のチーズ

右上：チーズとバターと・・・。バターがとても濃厚！おいしい！

右下：アルム小屋の中の昔ながらの搾乳場。とても清潔に使われている。

この他、バイエルン州では、このようなアルム農業を守るために、EU やドイツ政府の政策に加えて KURAP と呼ばれる独自の農業環境政策を持っているが、カタリーナさんはその中のメニューの1つ、希少な乳牛種の保護に取り組んでいる。

カタリーナさんは今、食農教育、食品加工、環境保護といったこれらの取り組みを近隣の11集落55世帯でまとまって行うことで、EUの地域プロジェクト(RDP)として採択されることを目指している。このプロジェクトの対象になれば、例えば体験プログラム用にトイレを設置するための費用に対し助成を受けたりできるようになるそうだ。地域プロジェクトの対象となるには、他の申請との競争を勝ち抜かなくてはならないが、中小農家がまとまって地域の伝統的な農業の維持に取り組む内容を評価してもらうことをカタリーナさんは期待していた。

カタリーナさんによれば、このあたりで農業をやりたい若者は多いが、経営の不安定性や小規模という条件のもとで経営がうまくいくかどうか不安であることから、踏み出せない若者も多いそうだ。現に、昨今のEU全体としての牛乳の価格の急落は、カタリーナさんを含むこの地域のアルム酪農家全体に大きな打撃を与えている。しかし、カタリーナさんの長男は、農業を継ぐと決めているそうだ。息子の決断について、

「私達は1000年近くここで農業をやっている。伝統を引き継ぐ意志は、自ら芽生えてくるものだ」

と自信あふれる様子で話してくれたのが印象的だった。その上で、「現在の小さい規模のままアルム農業を続けるためには、消費者の意識がかわらないといけない。そのような政策を求める」

と強調していた。

農業側の生産のみならず、加工や消費者への働きかけまで含めた多様な自助努力、それを支える国や地方の様々な支援プログラムにより、長い歴史を持つドイツのアルム農業は維持されており、地区事務所の担当者の話では、農村での深刻な過疎といった問題も今のところ起こっていないようだ。しかし、この伝統農業を今後さらに継続していくには、そこに消費者によるアルム農業を支えようとする行動が求められているのである。